委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第84巻の表紙写真を募集（テーマ：農村地域における農業施設・構造物：先人たちの技術と苦労が垣間見える造形美，平成27年9月30日締切）したところ，59点の応募がありました。10月27日に審査委員会（委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授）を開催し，12点を選定したので，ここに報告します。

講　評

柳本　尚規（東京造形大学名誉教授）

表紙写真を選ぶに当たって，テーブル上にずらっと並んだ写真を一点一点眺めながら，私はいつもそれぞれの遺構・遺産との類似性をもった現代の施設や景観を探している自分に気づく。それはしかしあまり楽しい気持ちをもたらしてはくれない。

自給自足の生活を営むために背後の狭い急斜面を削り直して田地をつくっていた集落やその一帯で生活のサイクルを完結させることができるようになっていた集落の写真を見ると，私はふと現代の自給自足図を想像するのである。

すると自給自足の源には海でも山でも川岸でもない，近くのスーパーがそれらに代わるものとして登場してくる。スーパーが海山川に相当するものになったとして，しかしいまや高齢化の進む社会になってスーパーに行くのも困難な人たちが続出する時代になった。灌漑用水路と回転寿司の発想も似ているが，それと同様現代の自給困難者はスーパーというため池から流れてくる水を受けるがごとくにひょいと調節板を上げて生きるための物資を受けて自足しなければ……そういう仕組みを編み上げた装置が我らの時代の遺構になるのか，文化的景観と言われるようになるのか……と，少し気分が沈んでしまうのである。

先人の使った，そして今に残っている工作物や工夫を見て，なんてつたないものかと笑う者はいない。携帯電話の原型を見て若者は笑うけれども，彼らとて堰堤や魚道を見て笑うことはないだろう。そこに＜人知＞というアイデアを超えた思考の原型が見えるからだ。

ここでの写真では河川にまつわる施設が主題になっていることが多いから，その分水などの仕組みをGoogleマップで確かめることが多くなった。そしてそのたびごとに，こうしたマップのない時代に，よくぞ地形，地勢を視野に欠かさずこんな計画をつくれたものだと感嘆させられている。同時に，Googleマップを見ていると，自然をいじってみたいという気持ちも起こる。ここで思わせられることは，現代人はこうして世界との遠近感を失ってきているのではないかということである。

そこから始まる傲慢さを気づかされるためにも，先人の残した知の痕跡を見ることが大事なのだろう。見ていると希望が湧いてくる。分からない時には歴史を読めと言われてきた。そうすると歴史は足下にあるのではなく，頭上にあることがよく分かる。と，表紙写真の選考会の席で，私はこんなことばかり思っている。

写真を撮る人たちも，他人にここを紹介しようという親切心はちょっと脇に置いて，ぜひそれぞれの方がリアルに胸を熱くした，そんな現実感溢れる一瞬を伝えてきてほしいと思っています。

第84巻表紙写真入選作品

1月号

大倉川農地防災ダム（小長井正道）

それにしてもどの位置から見ても富士山はあの商標登録マークのようなかたちを崩さない山だとあらためて思う。見る人が見ればそうではなくすぐにどの位置から見ているのか，見える姿の相違が分かるのだろうけれども，とにかく視界に入ればもうすぐに勝手に富士山の姿を頭の中に作り上げてしまって疑わないようなものにはその姿から自分の立ち位置を推測することなどはとてもとてもという感じになる。私たちの目は結構頑迷なのだ。いや，そんなことよりも，この写真はこんなところにダムが？と思わせる違和感に満ちているのが魅力である。

防災用につくられたこのダムはふだんは水を溜めおいていない。したがって災害につながるような気象にならなければこのダムは隠れダム然として少しの窪地の一面にしか見えないだろう。かろうじて堰堤の石積みと取水塔の建造物が，いやこれは何かが，と想像をかきたてるだけ，といっても過言ではない。二つの被写体をうまくまとめて一つの主題に合成した巧みな写真になっている。

2月号

遊子水荷浦の段畑斜面（木村匡臣）

この段畑の光景は，漁を生業とした生活を守るために田をつくって自給自足をしなければならなかったという事情を物語っている。

かつては海岸線や河川が交通路だったから迫る山との間のわずかな平地に人が集まり社会が形成されていった。しかし多くはすぐに住まいをつくる場所とて不足し，山を削って海を埋め立てする。そうして成り立ってきたところのどんなに多いことだろう。

この光景もそうした事例の様子を分かりやすく想像させてくる。それはまさに「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」を文化的景観と定めた保護法の語るところの典型例だ。文化とは歴史そのものであり，明暗が同居する。ともすれば詩的に見られがちな文化ではあるが，そこに内在する諸相を読み解く資料だということも，＜文化＞が示すところなのだと思う。石積みと搬送用のモノレールを造形的にも強調した象徴性が，逆に斜面の具体性を実感させてくれた。

3月号

世界一長い木造農道橋―蓬莱橋―（近田昌樹）

静岡県ときたら，大井川と茶畑。流れ出る太平洋に近づいたあたりの右岸に広がる牧ノ原台地の茶畑はつとに知られる。蓬莱橋はその茶畑の開発に由来する。

対岸の台地を＜宝の山＞に見立て茶畑を開墾し，その栽培がさかんになると住人は小舟による往来の不便さを解消してほしいと望むようになった。そうしてできたのがこの橋である。名前は＜宝の山＞への往来にちなむ。全長900 m に近く今ではギネス認定の世界一の木造歩道橋となった。

朝から夕方までは橋番がいて通行料を払う。橋番のいない時間は料金箱へ。大人，自転車は100円，子どもは10円だそうだ。しかし定期券というのもあって800円。

木造だから随所にコンクリートや鉄材の補強箇所はあるけれども写真で見る風貌は多分最初の頃から変わらない。ほどほどの手造り感，非人工感があって往来の便利さを味わった人々の気持ちが想像できる。ある時間と空間の息吹が感じられる景観である。

写真は，画面に大胆に，遅い午後の長い影を引かせて，この橋の歴史を導き出している。

4月号

桜と岩木川右岸水路（丹治　肇）

昔の桜はもっと色が濃かった，という人は多い。たしかに商店街の造花桜もいわゆる桜色も，いまでは全国区となったソメイヨシノにくらべればもっと赤色が強いと思う。ソメイヨシノでさえだんだん洗練されて淡くなってきたようだが，もともとは花弁の数や色，白色や淡紅色から濃紅色（これを桜色と言ってきたそうだ）の改良をめぐってさまざまな品種が作られてきていたのだから，近年の桜の白過ぎさへの印象も間違いではなさそうだ。

とはいえ，写真の疏水脇の桜の列はまさしく美しいイメージの中の桜色である。それぞれの人の頭の中に＜桜＞の像を結ばせるに違いない。いうまでもなく弘前公園のさくらまつりで賑わう濠の風景をつくりだすことにもなる写真の用水は津軽地域の重要な基幹水利施設ではあるが，逆に堤両岸の桜の列が用水路の重要性を教えてくれることになる写真だ。堤の強度を保つために桜の木の根が注目されたから列を成して植えられるようになった例はここに限らない。人知の豊かさをあらためて実感する。

いろんな要素がバランスよくあらわされたケレンのない写真に好感がもてる。

5月号

新緑と清流の薬研魚道（蛯名芳徳）

写真の魚道はまるでいろんな人々が暮らす都市の施設のように見える。目を細めて遠くを見るようにすると，さらに広域の景観となる。河川を活用した都市建設をするとしたら，きっとこんな姿になるのではないか。この魚道の模型をつくった人は，制作中に何を考えていたのかなという想像が楽しくなってくる。

薬研温泉で知られる青森県むつ市の大畑川にあるこの施設は，大畑川砂防ダムにある，隔壁の両脇を水が越えてゆくように，ということは隔壁の真裏は魚の休息場にもなるという心遣いにも富んだアイスハーバー式という魚道。

下北半島の津軽海峡海域に位置づく大畑町は，ニジマスを津軽海峡の外海で育てた海峡サーモンのブランド名をもつ養殖業もふくんだ漁業が盛ん。外海と内陸部に棲む魚種も豊かだというから，写真の魚道を行き交う魚たちの息づかいも感じられそうだ。生命が行き交っているという想像が広がる。ただ，全体に目を行き届かせた丁寧な写真だが，光に形作られる鮮烈さをもっと強調できたのではないか。それは露出のコントロールに少し気をやってみればいい。

6月号

天然の岩床を跳ね下る余水（本條忠應）

「岩鍋池－『涼感』と『躍動』を醸し出す先人の『知恵』」とある。

香川県は平坦な地形が多く水田開発に適しているが，降雨も少なく河川も少ないため灌漑用水には恵まれなかった。その対策はため池，である。雨水をため必要なときに使用するというため池は現在も1万以上の数に上っているという。鍋池もその中の一つ。余剰の水を放流する目的の余水吐水路設備も備わっている。写真はその放流の光景。

岩に当たって砕け散った水しぶきは私たちの風土観の大きな要素の一つである。というより，自然観の一角を成しているといってもいい。小さな遊園地の池にもしぶきの上がる装置があったり，そうでなくともそよぐ風に舞うしぶきを浴びる都会の中の公園の池まわりで，不快な表情をする人は見たことがない。雨で濡らされるのはつらいが，好天のもとで浴びるしぶきはごく平穏な自然の営みの中にいま在るのだという安心感を与えてくれる。

ただしここでは，生きもののような水の存在感をもっと大胆に表した方がいいと思う。光のどの明るさの部分に注目するか，に工夫がほしい。

7月号

シンプルで重厚な色合いの曲線美優れた愛宕堰　（石村英明）

写真を見ていて，夜来の雨はあがったがあちこちに沼ができたような校庭で，排水のために先生と一緒にたくさんの溝をつくって何とか運動会を中止させまいとした思い出がよみがえってきた。

これがさまざまな水路つくりの動機なんだといえるだろう。水を導くことには排水も用水もあるけれども，それらはすべて私たちの生活の営みにはいかに水との共存が大事なことかということを示すことになる。

一帯を親水公園としても整備された愛宕堰のある七郷堀幹線用水路は仙台平野を満たす用水路で，歴史的にも城下の農業，生活，また舟運などの地場産業にも貢献してきたそうだ。堀へは広瀬川から取水しているが，堀への取水を愛宕堰の数カ所に角材を入れて堰き止めて取り入れたり，逆にそれを上げて堀からの取水をすることなど，子どもたちが夢中になる水路遊びが高度な灌漑技術に練り上げられてみせられている感じで親しみがわく。粗いコンクリートの質感描写が素朴な施設の役割を静かに物語っているようだ。

8月号

疏水・古川頭首工（小池義夫）

愛知県安城と蒲郡を結ぶ路線の一部区間である名鉄西尾線は上横須賀駅と福地駅の間で矢作古川と安藤川の二つの河川を渡る。安藤川の上流は広田川と呼ばれる。矢作川と分かれた矢作古川と広田川は接近ししばらく並行するがそのおのおのに並ぶようにして頭首工（古川頭首工と吉良頭首工）が設けられている。西尾線が走る少し上流である。二つの川は線路の下を流れてまもなく合流し，矢作古川となって渥美半島と知多半島の懐へ出る。

古川の頭首工からは西尾市南部地帯へ農業用水が向けられている。一帯は海抜の高低差のない田園地帯で，そこに適度な量と速さの流れを保つには相当量の水を確保する堰をつくらなければならなかったようだ。すなわち，相当の土盛りをしなければならなかった。

それにしても愛知県の灌漑事情となるといつもその労苦の歴史が横たわる。そこに費やされた労力や構想の忍耐強さにいつも思いをはせるのである。写真の頭首工は際だった姿形ではない。その平凡さが逆に物語ることの多さを示しているようだ。てらいのない撮り方に共感がわく写真である。

9月号

ここにあるや元禄潜穴（合田　弘）

品井沼は宮城県中部にあって，周囲の丘陵地帯から流入する水によって形成された巨大な湖沼。その水はいくつかの川を通って松島湾に流れていたが落差がわずかだったためしばしば逆流して水害にあったそうだ。そこから干拓，排水路の計画がはじまった。その際地形的にトンネルを通さざるをえない箇所を通水するために掘削した穴が「元禄潜穴」。トンネルの長さは3,000 m 近くにも及んだという。いくつもの縦穴を掘り，その間に横穴（潜穴）を掘って相互連結させるという掘削方法が採られたのだろうと推測されるのだそうだ。

遺構を対象としたこの写真を見ても，海との高低差のわずかな中で現代の重機の類いも一切ないひたすら人力による工事がどんなに危険であったかが想像できる。ちょっとしたことで逆流水が入って犠牲者を生むなどということは茶飯事のことだったろう。

ほんとうは視察している人々の姿が邪魔になるのかも知れないが，この施設に限ってはそのおそろしささえ感じさせる希有な例への共感を呼ぶ仕掛けになっている。黒子の役割を果たしているので具合のいいシーンに出会ったようだ。

10月号

広瀬用水―広瀬川―（木村匡臣）

広瀬川は群馬の渋川市で利根川と分かれ前橋市街を流れて伊勢崎市でまた利根川に合流する。灌漑用水として整備されて江戸時代には物資を運ぶ舟運も盛んだった。現在は親水施設もととのえて広く市民に親しまれているようだ。

古地図を見ると，関東一円は網の目のように河川と用水路が交差し舟運の活用度が分かる。明治に入ってもオランダなどの例に範を得た内国水運網構想が試されたようだが，日本に固有な急流河川の治水対策まではかなわず急速に舟運活用はしぼんでいったと聞いた。写真に見る街中を流れる広瀬川の光景はかつての河川利用の面影を偲ばせるものだ。

水路の両岸に営まれる街のたたずまいはいいものだとつくづく思う。それがそもそも街の成り立ちのひとつのかたちだった。

近づけば流れる音も身体の血流と共鳴するようで，必ず川縁にたたずんでいる人もいる。飲む水も見る水も私たちには欠かせない。ふと外国を思わせるシーンは，水面を強調して外景を暗く抽象化した効果だと思う。

11月号

島守田園空間博物館―屋根のない博物館―（丹治　肇）

そこで生活を完結しうる場所だったのだからかつての農村はどこもみな今でいう＜博物館的景観＞をもっていただろうと思う。つまり生活，ということは生業に必要なものが合理的に編まれていたということ。それが集落を成していたのだと言えよう。そう思うと，この＜空間博物館＞は現代人の生活がいかに個々に離れていかんともし難い仕組みの上に成り立っているのかを教えてくれる場所になる。

なぜ田園空間が豊かさを思わせてくるのかについて考えよ，と問うているような写真だ。つまりすべてが強く関連しあって成り立った，用の要を農村空間はつくってきたのである。そこで育まれてきた人間性も想像したい，その想像を堪能したいとしきりに思わせられる写真なのである。

まさにジオラマ。午後の光に遠近感を語らせて，目をずうっと移動させる，気持ちの良い写真である。

12月号

白水溜池堰堤―通称 白水ダム―（細川吉晴）

なんと美しいダムだろう，と叫びたくなる。「白く輝きながら曲線に走り落ちる水と癒しの連続音の創造美こそ白水溜池堰堤のもつ特徴」と撮影者のメモに添えられてあるが，ここにもまだまだ言い足りない思いがにじみ出ている感じだ。このダムに関する資料を少し探ってみたが，「若き農業土木技師の創意から生まれたダムの貴婦人」とか「堰堤の転波列を超えた水流が織りなす模様はさながら絹のレース」とか，こういう言葉がちりばめられて説明されるダムもそうは聞かない。

もう１世紀近く前に創刊されグラフジャーナリズムの先駆として世界を席巻した「ライフ」という週刊グラフ誌があったが，創刊号を華々しく飾ったのがルーズヴェルトの政策によってモンタナ州にできた壮大なフォート・ペック・ダムの偉容。当時世界最大規模の体積を誇ったコンクリートの巨大な建造物だが，なんであれ，＜私＞を超える存在への神聖な気持ちが引きだされてこのグラフ誌の発刊を成功させた。

＜貴婦人ダム＞もしかり。敬虔な気持ちの世界に引き込まれるままに撮った，という感じが漂っている。写真も，陰になる水流の青さと下りきったところの白色のコントラストが目を引きつけるゆえんだ。